

# 先入観で広がる「胃ろう拒否」

## 矢療現場に混乱・困惑

のみ込む機能が低下した患者の効果的な栄養補給手段として、腹部を開けた穴から栄養剤を送る「胃ろう」。この数年、「過剰な延命治療」とのイメージから、拒否する患者が増えている。その一方で、感染症の危険性が高い静脈からの栄養補給法などを選び、苦しむケースもみられ、医療現場で困惑が広がっている。

(山本真嗣)

「胃に穴を開けてまで生きたくない。死んだ方がまし」。三重県内の病院で七月になつた七十年代の女性は、胃ろうを拒み続けた。一年前から、免疫の異常で体の組織に炎症が起きる膠原病の一種を患い、自力でのみ込むことができなくなつた。二月に他の病院から転院してきたときは、本人の希望で鎖骨下の中心静脈にカテーテルを埋め込み、高カロリーの輸液を流し込む「中心静脈栄養法」を施されていた。

胃ろう問題に詳しい「ふきあげ内科胃肠科クリニック」(名古屋市千種区)の鶴江治郎院長(55)によると、消化管が機能し、栄養補給が短期の場合は鼻から管を入れる「経鼻経管栄養法」、消化管が機能しない場合は静脈からの栄養補給が望ましいという。「これらは胃ろうの普及前、長期の栄養補給にも使わ

しかし、この栄養法はカテーテルを長期間、血管に留置するため感染症が起きやすい。胃腸を使わないと免疫力も下がる。主治医は何度も胃ろうを勧めたが、意思は変わらなかつた。心配した通り、女性は細菌感染症が全身に及ぶ敗血症に。最後は重い呼吸不全に陥つた。本人の意向を尊重した結果で、家族は納得しているという。だが、主治医は「救えたかもしれない命と思うほど、複雑」と話す。

患者への医療の希望調査、「胃ろうによる栄養補給」は希望せず、「胃ろうによる栄養補給」を希望している。三重県内の病院で

## 代替方法で感染症や苦痛

されたが、感染症の危険性や管理が煩雑など欠点が多かつた。

一方、胃ろうは消化管が機能し、一ヶ月以上の長期の栄養補給が必要な場合、自然な消化吸収が期待できる安全な最も優れた方法。体力が回復し、口から食べられるようになれば器用を取り外すことができる。

ところが、「胃ろう」意味のない延命との先入観が広がり、患者や家族が終末期の延命治療なのか、回復に必要な栄養管理なのか、十分に考慮しないまま「胃

り六人増えた。

鶴江院長は胃ろう拒否が増えた原因に、延命治療の是非に焦点を当てた報道や、日本老年医学学会が昨年出した高齢者の終末期医療に対する考え方などを挙げた。

同学会は「胃ろうを含む経管

## 「終末期以外なら利点も考慮して」

「これは嫌だが、他の栄養補給をしてほしい」という人が増えていく」と、鶴江院長は指摘する。

医療機器の市場調査会社アーレアンドティ(名古屋市瑞穂区)

によると、全国の胃ろうの販売キットの出荷数は昨年が十一万三千四百セットで、前年より14%減少。今年はさらに十万セット近くまで落ち込む見通しだ。

過剰拒否の弊害を訴えている医師によると、自身が担当する医療病床で、長期の経管栄養を

胃ろう 内視鏡で腹部から胃

に数ヶ所の穴を開け、外部とつなぐキットを組み込み、管を通して直接、水分や流動食、薬剤を流し込む。血管内にカテーテルを留置する静脈栄養法は、細菌が全身に行き渡るリスクが高いが、胃ろうは感染症が起きても大半が傷口部分でとどまるためより安全とされる。

その後、転院先の病院で苦しめ、延命を望んでいない患者では、延命治療が頭に浮かんで拒否。母は一命を取り留めた後、経鼻経管栄養を実施した。鶴江院長は「終末期と診断され、延命を望んでいない患者であれば栄養補給をせず、在宅でしまつため、両手に防止用のミットがはめられ、ひも状の抑制帶で腕をベッドに拘束される」ともあった。そんな姿を見かねて胃ろうに変更。力の抜けた

が、テレビで見た延命治療が頭に浮かんで拒否。母は一命を取り留めた後、経鼻経管栄養を実施した。鶴江院長は「終末期と診断され、延命を望んでいない患者であれば栄養補給をせず、在宅でしまつため、両手に防止用のミットがはめられ、ひも状の抑制帶で腕をベッドに拘束される」ともあった。そんな姿を見かねて胃ろうに変更。力の抜けた

が、安全第一。互いに相手を尊重する気持ちが大事だと思います。大人になつたら、先生みたいにならざる医師になります」と、主治医は「ぜひ、心配な氣分」の記事で、血液が残った注射器を目の前で捨てられたことを、不快に思つた意見が紹介されています。でも即座の廃棄は、正しいことではないでしょうか。

血液を介して感染する病気もあり、すぐに処分しなければ、医療事故にもつながりかねません。逆に自分が検査するときに、他人の血液が入った注射器が近くにあつたらどうで

しょうか。気持ちは分



外来

からなくはないです  
が、安全第一。互いに  
相手を尊重する気持ち  
が大事だと思います。  
(愛知県 女性40歳)

一昨日、左目を手術

しました。無事に終

え、女性の主治医に

「大人になつたら、先

生みたいにならざる医師

になります」と話し、力

強く握手しました。本

当に素晴らしい医師は

病を治すだけではな

く、人に夢を与え、心

から患者さんと親身に

話ができる人だと思いま

ました。

廃棄は正しい処置・心通わせる主治医

医療取材班▶iryouhan@chunichi.co.jp

医療に関する過去の記事は「中日メディカルサイト」で閲覧できます

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208